関西大学文化交渉学研究拠点
Aug. 2020 No. 6

関西大学文化交渉学
ICIS NEWS LETTER
ニューズレター

CONTENTS

— 学術研究期間の思い出
— 東アジア文化交渉学会第12回国際シンポジウムの開催について
— 研究班活動報告　— 研究員の活動報告

学術研究期間の思い出

2019年４月から１年間、学術研究員として、ウズベキスタン、中国、韓国に滞在する機会を得た。充実した調査と研究、そして交流の１年であった。関西大学をはじめ、快く送り出して下さった先生方に感謝申し上げる。それらはいずれ研究成果をもって報いたい。だが海外での暮らしには、研究だけでなく、現地でしか得られない感慨深い思い出がある。ここではそれについて述べたい。

ウズベキスタンでは、フェルガナに行った時、朝の空港で、ISに誘われて出て行った息子らが（政府の交渉で）無事帰還し、出迎えた母らに抱きしめられる場面に遭遇した。アフガニスタン領が数キロ先に見える遺跡では、狙撃銃の弾丸（撃った後の）や（人？）骨が散乱していた。「我々も監視されているよ」とガイドが遠くの監視台に手を振りつつ、「今のうちに撮影しなさい」と言ってくれた。生と死が隣り合わせの社会で生きる人々の苦悩とたくましさを知った。日本では得られないムスリムの知識や思考、人間性に触れることができたのは幸いであり、イスラームに対する考え方が大きく変わった。

中国では、調査のため便乗したジープが悪路につかまってクラッチが焦げつき、海抜4000m近い断崖絶壁の中で３時間ほど立ち往生したこと（お昼でよかった）、知らずに外国人立入禁止区域に宿を取ってしまい、公安に呼び出されて一緒に写真を撮られたこと（皆笑顔で。朝一でこの地を去れと言われた）、そして滞在したアパートのWifiで携帯を使っていると、４日に１回は外部から不正アクセスされたこと（ノートンは警告をしてくれる良いソフトであった）などが思い出される。調査の旅程は全体的に良好であったが、中国政府の重点的な管理と監視、統制を実感した。

韓国では、ウズベキスタンから入国した日に高熱と咳の症状があらわれ、翌日相談センターに電話したところ、即時近くの選別診療所でコロナの診断を受けさせてくれた（陰性で本当に良かった）。外国人に対しても迅速かつ親切に対応してくれた。ありがたいことであった。慶州博物館では、コロナ禍で中止となった調査を後日に行うことについて、全面協力を確約していただいた。

最終帰国のフライトは、関空まで来たものの強風で着陸できず、仁川空港に戻ってしまった。数十年間の往来で初めての出来事であった。この日は日本政府による入国制限の２日前。しかし同日の22時に再度フライトし、24時前になんとか関空に着陸してくれた。済州航空の配慮に感謝である。

関空では、臨時の入管スペースにコロナ対策職員が配置されていた。入国者は誓約書のようなものを書かされ、執拗に質問されたあげく、「公共交通を利用せずに自宅まで帰れ、レンタカーを使えば問題ない」と追い出された。だが夜中の１時にやっているわけがない。家族４人で取り残された関空の夜風は冷たかった。一緒に入国した外国人たちはどうしただろう。杜撰かつ無責任な対応は韓国と対照的で、日本の行く末を憂いた。

（文学部　篠原 啓方）

カラテパ(Kara Tepa)からアフガニスタンを望む

夏瓊グンバから黄河を望む

東アジア文化交渉学会
第12回国際シンポジウムの開催について

東アジア文化交渉学会第12回国際学術大会は、当初の予定では、2020年５月９日(土)、10日(日）に下記のテーマで中国鄭州大学にて開催されることが決定していた。

第12回年次大会は、鄭州大学漢字文明研究センター主催の下、「文化交渉媒質としての漢字：伝播と影響」をメインテーマに、漢字と漢籍の伝播、東アジア、ないし世界文明への影響を中心に研究発表を行う。

漢字と文化交渉に関する研究

１．漢字の発展史と伝播史
２．朝鮮半島の漢籍と漢字の伝播
３．日本の漢籍と漢字の伝播
４．ベトナムの漢籍と漢字の伝播
５．琉球漢籍と漢字の伝播
６．西洋漢籍と漢字の伝播
７．東アジア漢籍の総合研究
８．東アジア漢字の総合研究
９．東アジアの漢字データベースの構築と研究
10．その他関連研究

知識転移と文化交渉に関する研究

１．知識還流の世界史
２．近代知識の転移と漢字
３．文学、歴史及び哲学の翻訳と知識転移
４．19-20世紀の東アジア学術発展史
５．帝国・民族・地域の知識交渉
６．東アジアの知識史に関する研究
７．文化生産と再現
８．知識の伝播と複製
９．その他関連研究

2020年１月申し込み締切時点において、200名余りの申し込みがあり、すべて順調に運んでいた。しかし、新型コロナウイルスの世界規模の感染拡大という予想外の事情により、会期が９月下旬か10月中旬に延期されるのを余儀なくされた。最悪の場合、オンラインによる開催も視野に入れ、現在準備委員会では鋭意検討中である。オンラインによる開催の場合は、11月８日（日）が最も有力である。

これまでに東アジア文化交渉学会は、大阪、台北、武漢、ソウル、上海、香港、北京、ドイツのエアランゲンなどで11回行われ、関連分野の研究者が一同に会し、研究成果を発表し合い、交流を深めると同時に、文化交渉学の研究を大いに発展させていた。新型コロナウイルス感染が収束した暁、会員たちが、また笑顔で再会することを願ってやまない。

（外国語学部　沈　国威）

研究班活動報告

言語交渉研究班

2019年度は先ず４月に「学科、知識、詞语與近代中国」と題した国際シンポジウムを皮切りに、６月に国際シンポジウム「東西文化の翻訳のかたち—聖像画の変容を中心に」、11月には国際ワークショップ『敦煌写本の諸相』を開催したほか、2020年１月に『言語接触研究の諸相』のテーマで研究例会を行った。この他、デジタルアーカイブ関係では、KU-ORCASと連携しながらシンポジウム等での積極的な発表参加が行われた以外に、今年度、ようやく「近代漢語文献データベース」が完成し実用段階に入った。今後、データを更に追加して漢語研究者の利用の便に供したいと考えている。また、近代漢語語彙コーパスの活用による近代概念史研究も開始された。なお、各メンバーは積極的に研究成果の公刊も行っており、『南京官話資料集－《拉丁語南京語詞典》他二種』（関西大学出版部）、『華英通語』四種－解題と影印』（関西大学出版部）、『言語接触研究の最前線（東西学術研究所研究叢書第８号、言語接触研究班）』（ユニウス）等が刊行された。2020年度もこれまでと同様な研究活動を行っていくつもりであるが、新型コロナウイルスの影響もあり、ZOOM等でのシンポジウムや研究会を模索していくことになると思われる。

（主幹　内田 慶市）

東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班

「東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班」は思想、宗教、儀礼、文学、芸術などの分野を視野に入れ、東アジアにおける文化の伝播、交流、影響、衝突といった文化交渉のダイナミックな様相をたどることを目標としている。

初年度の2019年度は「近代日中の学術と芸術の新しいアプローチ」、「中国・日本の宗教と儀礼をめぐって」、「近現代日本・中国・西洋の相互理解と文化交渉」「風景の絵画化」の各テーマのもとに研究例会を開催し、多くの新しい知見を得た。研究員の刊行物としては吾妻重二編著『東西学術研究と文化交渉—石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム論文集—』、二階堂善弘著『東南アジアの華人廟と文化交渉』、中谷伸生編著『風景論—東アジアから見る・読む・考える』、陶徳民著『松陰とペリー—下田密航をめぐる多言語的考察—』（いずれも関西大学出版部）があり、これまたきわめて充実している。

これらはいずれ劣らぬ労作であるが、とりわけ東西学術研究所の創始者であり、また本学のアジア学・中国学の礎を築いた石濱純太郎を記念する論集『東西学術研究と文化交渉』は、本研究所の歴史の節目にもなる意義深い出版物であったといえる。我々が今進めている「文化交渉学」は、そのルーツをたどっていけば石濱に行きつくからである。

今年度（2020年度）の研究例会は新型コロナウイルスの影響のため前半期は休止状態に陥ったが、教員の研究員はほとんどが科研費の研究代表者もしくは分担者でもあり、各自の研究は停頓することなく進められている。後半期はZoomなどを用いたオンライン形式による開催も準備している。

このほか今年は泊園書院の黄金期を作った藤澤南岳の没後百年にあたっており、10月に泊園記念会などと協力して記念行事「南岳百年祭」を開催すべく計画中である。泊園書院のWEBサイトもリニューアルし、７月27日、新たな装いのもとに公開することができた。

（主幹　吾妻 重二）

ユーラシア歴史文化研究班

2019年度のユーラシア歴史文化研究班の活動は研究例会を一度開催したことにとどまった。実は、2019年度末に、もう一度研究例会を開催する予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大を懸念し、中止になってしまった。

研究班の活動としては、10月26日に「中国王朝の「異民族」統治方法に関する問題と考察」をテーマとし、研究班主幹の森部の科研費補助金（JSPS16K03100）による研究成果の報告をあわせて、研究集会を開催した。森部の基調報告「唐朝の羈縻政策をめぐる諸問題」にはじまり、外部から招聘した新津健一郎（東京大学大学院生）「唐代南方統治政策における羈縻州の位置」、齊藤茂雄（大阪大学）「唐代前半期における突厥羈縻集団の形成と解体」、佐川英治（東京大学大学院）「羈縻政策としての北魏六鎮」の三人の研究発表をおこなった。

唐朝の異民族支配の形態である「羈縻支配」は高校の世界史教科書にも記述されるもので、その一般的理解は、唐朝へ帰順してきた周辺諸部族の首領に唐朝の官職（地方長官）を与え、その麾下の部族集団を唐の地方行政制度にあわせて「州」とし（羈縻州という）、それら部族集団を唐朝が間接的に支配するというものである。首領が就いた地方長官の職は世襲され、羈縻州は自治的組織だったと理解されてきた。しかし、近年発見された墓誌をはじめとする石刻史料によれば、そのような一律的見方では理解できない事実が確認され、また正史などの記述も丹念に読みなおすと、通年的理解は書き換えられる段階に入っていることが、この研究集会の各論によって明らかにされた。

2020年度の活動としては、2019年度、在外研究のため不在であった篠原研究員と澤井研究員が復帰するため、本来の研究班メンバーが活動可能な状態である。コロナ禍の影響で、どこまで実践できるのか不透明なところはあるが、まず2019年度の終わりに開催予定であった研究例会の開催を目指し、ついで唐代のモンゴリアにいた騎馬遊牧民であるウイグルを取り上げ、専門家を招へいし、研究集会を開く計画である。

（主幹　森部　豊）

研究員の活動報告

コロナ禍での研究活動

昨年度から本研究所ユーラシア歴史文化研究班に所属している。ここ数年の研究テーマは、17・18世紀東部ユーラシアのチベット仏教文化圏における様々な人的交流とその作用である。今年度も現地での調査や史料収集、学会参加などの活動を予定していたところに、このコロナ禍である。

今年度予定していた学会や現地調査は、ここまで全てキャンセルになった。８月に参加予定だった第７届北京国際藏学検討会（BISTS）も、2021年10月に延期されることが決まった。国内の学会・研究会も軒並み延期もしくは中止。秋冬シーズンの予定にはまだ留保中のものもあるが、恐らく出張を伴う活動は無理だろう。

ちょうど昨年の今頃は、フランス国立東洋文化学院で催された第15回国際チベット学会（IATS）に参加していた。あの頃は、よもや一年後世界がこのような状況になっていようとは、微塵も考えなかった。遠方の研究者同士の交流、研究対象地域での調査活動が制限されることは、個々の研究に支障をきたすのみならず、学界全体の歩みを滞らせることにも繋がりかねない。などというと、容易に海外渡航などできなかった時代にも多大な業績を遺してきた先学たちにお叱りを受けるだろうか。

もちろん、今やれる事はたくさんある。大陸では近20年ほど大型史料集の刊行が陸続と続いているし、世界的な史資料のデジタル化の趨勢はますます盛んだ。オンライン授業対応がひと段落すれば、じっくりと目の前の史料と向き合う時間を持ちたいと思っている。親しい研究仲間たちとのオンライン講読会も予定しているところである。

IATSの次回（2023年）の開催地はプラハに決定。無事開催されることを祈る

弘化寺（青海省民和県）の城壁跡（明清時代）

さりとて、現地に足を運んで得られる知見はやはり何ものにも替え難く貴重であるし、コピーやデジタルで配信される情報には限りがある。些細な手がかりを求めて、また現地を訪れることができる日を心待ちにしている。

（文学部　池尻 陽子）

自宅からのZOOM授業

退職後、自宅の庭で昼間からワインを楽しむ生活を夢見ていたが、いささか甘い考えだった。というのも、ZOOM授業の準備など、それなりに時間がかかるからである。卒業式の時に、学生からもらったワイン・グラスも何だか寂しそうだ。新型コロナウイルスの流行で、自宅から大学の講義を発信してはや２カ月が過ぎた。慣れてくると、奈良から往復３時間もかけて関大に通うよりも、ZOOM授業の方が楽だ、と思うようになってきた。人間というのは、やはり「慣れ」が大きいと思い知らされる。しかし、新入生の顔を画面では見ていても、実際に対面してみたいとも思うわけである。便利なZOOMにもやはり限界がある。大学院の去年までのゼミ生には、ZOOM授業が終わったあとに個別にラインで電話をして、希望を訊くように心がけてはいるが、いささかはがゆい。ZOOM授業の問題は、現実の空間がないので、受講生の雰囲気や感情が捉えにくいことであろう。ZOOM飲み会なるものもあるそうだが、これまた何とも言い難い感覚を味わう集まりに違いない。私はZOOM煎茶会の話し手として登壇した経験があるが、大阪から台北まで広がる参加者たちは、どのような満足感に浸されたのだろうか。コロナ後の東西学術研究所では、全国各地、さらには海外の研究者を集めて、頻繁にZOOM研究会が開かれることになろう。

庭のテーブルと学生にもらったワイングラス

（東西学術研究所非常勤研究員　中谷 伸生）

図書の出版

■ 関西大学東西学術研究所研究叢刊

東西学術研究と文化交渉
—石濱純太郎没後50年記念
　国際シンポジウム論文集—

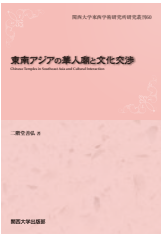
吾妻　重二 編著

2019年11月1日発行／512ページ

東南アジアの華人廟と文化交渉

二階堂　善弘 著

2020年2月13日発行／146ページ



風景論
—東アジアから見る･読む･考える

中谷　伸生 編著

2020年3月30日発行／348ページ

西士與近代中國：羅伯聃研究論集
—ロバート･トーム研究（研究と影印）—

沈　国威 編著

2020年3月30日発行／314ページ

松陰とペリー
—下田密航をめぐる多言語的考察—

陶　徳民 著

2020年3月31日発行／162ページ

■ 関西大学東西学術研究所資料集刊

『華英通語』四種 — 解題と影印

内田　慶市
田野村忠温　編著

2020年3月25日発行／670ページ

南京官話資料集
—《拉丁語南京語詞典》他二種—

内田　慶市 編著

2020年3月31日発行／494ページ

■ 関西大学東西学術研究所研究叢書

第7号 東アジア圏における文化交渉の軌跡と展望

井上　克人 編著

2020年2月5日発行／296ページ

発行所／株式会社ユニウス

第8号 言語接触研究の最前線

内田　慶市 編著

2020年2月29日発行／133ページ

発行所／株式会社ユニウス

■ 外部出版による研究成果報告

勉誠出版　アジア遊学245号

アジアの死と鎮魂･追善

原田　正俊 編

2020年3月10日発行／208ページ

「南岳百年祭」の開催

今年（2020年）は大阪の漢学塾「泊園書院」の第二代院主、藤澤南岳（1842-1920）の没後百年にあたっている。そこで東西学術研究所は泊園記念会に協力し、学校法人関西大学、関西大学校友会などの支援のもとで記念行事「南岳百年祭」を開催することとした。

讃岐出身で泊園第一代院主として活躍した藤澤東畡の子南岳は、幕末の高松藩の危機を救った功労者として、また泊園の黄金期を作った漢学者として著名である。

近畿を中心に全国から南岳のもとに集った塾生たちは、のちに政界・官界・実業界・教育・ジャーナリズム・学問・芸術などさまざまな分野で活躍、幕末から明治・大正・昭和にかけて日本の発展に大きく貢献する。南岳はまた通天閣や仁丹、愛珠幼稚園、寒霞渓（小豆島）などの命名者でもあった。泊園書院が関西大学の知的ルーツの一つとなったこと、泊園文庫の本学への寄贈が東西学術研究所創設の契機となったことも周知のところであろう。

行事の開催方法は泊園書院に縁の深い人々20名ほどで発起人会を作り、その発起人会の名前で各方面に広く呼び掛けることとなった。予定はおおむね次のとおりである。

【南岳百年祭・行事日程】

一、発起人会

10月22日（木）　関西大学尚文館７Ｆ特別会議室

二、記念シンポジウム

10月23日（金）　関西大学梅田キャンパス８Ｆ
“KANDAI Me RISE ホール”

○ **講 演 会**

町　泉寿郎（二松学舎大学教授）
横山俊一郎（関西大学非常勤講師）
井上　孝榮（三重郷土会評議員）
吾妻　重二（関西大学教授・泊園記念会会長）
司会：藪田　貫（関西大学名誉教授・泊園記念会名誉会長）

○ **記念イベント**

関西大学吟詩部 OB による詩吟
山寺美紀子（東西学術研究所研究員）
古琴演奏

10月24日（土）　関西大学千里山キャンパス
以文館４Ｆセミナースペース

○ **研究発表**

杉村　邦彦（京都教育大学・四国大学名誉教授）
太田　　剛（四国大学教授）
長谷部　剛（関西大学教授）
増田　周子（関西大学教授）
吾妻　重二（関西大学教授・泊園記念会会長）
司会：二階堂善弘（関西大学教授）

三、書画展示「藤澤南岳の書と芸術」

2020年10月15日（木）～2020年11月21日（土）
場　所　関西大学総合図書館１Ｆ 入口展示室
（９時～17時）
南岳らの書画、印章、泊園文庫貴重書など

７月27日、これに合わせて「WEB 泊園」を全面的に改修し、より魅力的なサイトとして公開した。

記念シンポジウムはオンラインで同時配信の予定である。この機会に南岳の功績を回顧・研究し、また広く発信すべく取り組みたい。

記念シンポジウム
申し込みフォーム

（文学部　吾妻 重二）

編｜集｜後｜記

2020年は、誰もがこんなことになろうとは想像しなかった世の中に一変し、私たちの暮らし方や働き方、学び方も変えざるを得なくなりました。諸学会活動も新しい取り組みが実践されつつあり、それはそれでうまく機能しているようですが、多くの研究者がある場所に集まり実際に顔を突き合わせることによって醸し出される空気は、何ものにも代え難いものがあるのではないでしょうか。
ICIS ニューズレター No.6をお届けします。今回も、研究所事務グループの奈須智子さんの全面的なサポートにより無事に発行することができました。（編集者）

表紙上掲載写真：
【左】緊急事態宣言下の千里山キャンパス
【右】例年４月の千里山キャンパス

発行：関西大学文化交渉学研究拠点
（Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies）

〒564-8680　大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL：06-6368-0653　FAX：06-6339-7721
E-mail：touzaiken@ml.kandai.jp
URL　www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/

発行日：2020年（令和2年）8月